

## 感性空間とリズム

### —— L. クラーゲスの哲学における現象の構造

今橋勇介

#### 1. L. クラーゲスとリズムの哲学

ルートヴィヒ・クラーゲス（Ludwig Klages 1872–1956）の哲学は、長らく正統的な哲学史の外部に置かれてきた。それは彼の思考が、既存の哲学的伝統に反発し、「精神（Geist）」に対する「生命・魂（Seele）」の優位を強く主張する、鋭い二項対立を打ち出したことに由来する。こうしたクラーゲスの立場は、しばしば世界を知的に構築する「精神」を本来的生命を疎外し抑圧するものとみなす「非合理主義」、あるいはドイツ青年運動に影響を与えたファシズム前夜の思想と批判されてきた<sup>(1)(2)</sup>。

クラーゲスの著作においてもっともよく知られた『リズムの本質について（*Vom Wesen des Rhythmus*）』（1933）で展開されるリズム論もまた、同じ精神と魂という二項対立に基づくものである。「拍子は反復し、リズムは更新する（*der Takt wiederholt, der Rhythmus erneuert*）」という命題で知られるように、精神が把握する「拍子」から、生命的な律動である「リズム」を区別することが本書において一貫して主張されている。クラーゲスによれば、リズムはこれまで精神によって分析的に捉えられる時間の客観的な法則性と考えられてきた。しかしこのような理解ではリズムの体験に含まれる根源的なダイナミズムを捉えることができない。なぜならリズムは単なる認識対象ではなく、精神のあり方そのものに働きかけるような力を持っているからである。クラーゲスは規則的な「拍子」から区別される「リズム」構造を、類似しつつもつねに差異をとまなう「分節的連続性（*gegliederte Stetigkeit*）」と定義する<sup>(3)</sup>。

以上のようなリズム論は比較的知られているが、さらにクラーゲスが時間や空間の編成にまでこのリズムの働きを見出している点は理解されていない。「時間的な現象であって空間的な現象でないものではなく、また空間的な現象であって時間的でないものもない。それゆえ現象の時間性のあるリズム的な分節（*Gliederung*）は、つねに同時に

その空間性のリズム的分節でもあり、その逆もまた然りである」<sup>(4)</sup>。すなわち彼のリズム論は、生命的なリズムを精神的な拍子から単に現象として区別するだけでなく、現象そのものの背後にあるリズム的な構造を捉えることを目的としている。たしかにクラークスは「生の哲学」のドイツにおける担い手として知られており、主客の分離を前提にした近代的な「経験 (Erfahrung)」に先立つ、主客未分の生の「体験 (Erlebnis)」を基軸に議論を展開する。そのため、こうした生命的なリズム体験を根柢に据えるという点は、彼の思想からすれば自然な帰結ともいえる。とはいえ時間と空間の根底にリズム構造を見いだすという主張は、容易に理解しうるものではない。以下では、クラークスの主著『魂の敵対者としての精神 (Der Geist als Widersacher der Seele)』(1929) 第一巻における生命の体験過程に関する議論を参照しつつ、時間と空間がどのように上述のリズム構造と結びつくのか、その理路を明らかにしたい。

## 2. クラークス哲学における現象

主著『魂の敵対者としての精神』はクラークス哲学の集大成とされる全三巻構成の大著であり、そのうち一巻と二巻は1929年に刊行された。この主著においては主に、精神によって把握される「事物 (Ding)」の現実と、魂によって体験される、意識から独立した「イメージ (Bild)」の現実とが厳しく対置されており、両者の相違が様々な知見から論証されている。そしてその第一巻二十九章においては、とりわけ次のような問いが中心的に扱われる。すなわち、なぜ生命の体験過程から精神によって凝固された「事物」中心の現実が生じるのかという問いである。この問いはさらに、精神による「把握」の起源や根柢がどこにあるのか、という分析へと展開していく。分析を敷衍すれば以下のようなようになる。すなわち、精神はたえまなく移り変わる体験の流れの中にありながらも、ある瞬間の時空間を「現在」として切り出して対象として把握する。しかしそのような現在なるものの切れ目が可能であるのは、時間そのものがあるから「生命的に分節化されている (vital gegliedert)」からである。

では、現在はどのようにたえまなく流れ去る現実のなかから、精神の働きを介することなく生じうるのか。クラークスによれば、現実の変容をただその通りに受容する

だけでは、さまざまな現実のもたらす異なる質性が像を結ばずそのつど過去へと流れ去るばかりで、何が何と異なるのかということさえ判然としない。ある瞬間は、他の瞬間との関係のなかで捉えられることではじめて他から際立ち、それとして見出される。ゆえにそれらの素地となるよう関係しあった体験過程だけでなく、そこに切れ目を入れつつも関係させるような契機がなくてはならない。

クラークスがこのような切れ目として示すのが「感性空間 (Sinnenraum)」である。それは「直観空間 (Anschauungsraum)」とも呼ばれ、精神によって対象化された「事物空間 (Sachraum)」や、絶え間なく変移する現実時間に支配された「現実性の空間 (Wirklichkeitsraum)」あるいは「流れ去った空間 (verflossener Raum)」からは区別される。感性空間は、魂の体験過程に即して生じる空間であり、以下で見るように出来事を魂に媒介しつつ現象へと至らしめる契機となる。

クラークスによれば、こうした感性空間こそ移り変わる現実のなかに「現在」という切れ目を生じさせるものである。彼は、現在を意味する「Gegenwart」が「居合わせている (gegenwärtig)」という「現前 (Anwesenheit)」と同等の意味を帯びることを示唆しつつ、以下のように述べる。

まさに今、氷のかけらに触れてその冷たさを感じている者は、冷たさという現前的な (präsenten) 印象を被るために、出来事を観得する (Schauung) という運動的状态を離れ、その状態を媒介的に鏡映 (Spiegeln) という静止している状態へと置き換えなければならなかったなどは、まったく意識しなかった。そして、どれほど訓練された「内観」 (Introspektion) であっても、このことを彼に気づかせることは決してない。しかしながら、彼にはかくのごとく自覚する能力は十分にあるのだ。すなわちそれは、冷たさそのものが現れてくるには、それを支える冷たさの現前が不可欠であり、その現前 (Anwesenheit) は、冷たさという事実内容とはまったくの別物であるということに思い至る能力である。そしてこの気づきによって、彼は今という瞬間に対しても、たとえどれほど短くとも、ある時間的な広がりを与えざるを得なくなる。<sup>(5)</sup>

引用箇所においてクラークスは、意識に上ることのない体験過程を「観得 (Schauung)」と「鏡映 (Spiegeln)」に分けつつ、具体的な知覚の背景にある時間と空間の関係について説明している<sup>(6)</sup>。補いつつ敷衍する。たとえば氷のかけらの冷たさという感覚が生じるためには、まず体験の過程が「観得」という動的な状態でなくてはならない、とされる。つまり冷たさという質性の体験が積極的に行われなくてはならない。それに加えてその過程は、それまでに体験されたものすべてを鏡のように反映する静止した状態へと移行しなければならない。どういうことか。クラークスによれば、単に現実の多様な質性をそのまま受容するのみでは魂は現実に呑み込まれ何も知覚できないことになる。たったいま過ぎ去ったものを現在と異なりながらも現在において受容するためには、過ぎ去ったものを現在に反映する「鏡映」という無自覚の回想過程が備わっていないとなくてはならない。それによつてはじめて、たったいま感受された質性はその後で感受される質性と連関をなす。しかしこの鏡映の過程は、冷たさという質性そのものを受け取るわけではない。引用箇所において「鏡映」過程は、「冷たさという事実的な性質 (Tatbestand)」ではなく「冷たさの現前 (Anwesenheit)」そのものを感受するとされている。すなわち、冷たさという質性そのものの「観得」ではなく、冷たさがいまここに現前しているという、ある種の空間性を「鏡映」過程は受容している。それはさまざまな質性を「媒介的に (intermediär)」結びつける空間であり、つねにそのつどの質性を「現在」するものとして位置づける。そうして初めて一つの「印象 (Eindruck)」が現在のうちに像を結ぶに至るのである。

もし瞬間の、共に体験される時間性がなければ、瞬間の連なりは存在しえず、そしてその連なりがなければ、そもそも瞬間それ自体も存在しない。というのも、瞬間が瞬間であるためには、それが持続するもの (Dauernde)<sup>(7)</sup> から (gegen) 際立つことによつてのみ、そうなり得るからである。ここから不可避的に導かれるのは、直観的に現在している横断的な空間 (der anschaulich gegenwärtige Querraum) は、すでに流れ去った空間との対照 (Gegenstück) の関係なしには成り立たず、そしてその流れ去った空間との関係においてはじめて、それは現在性 (Gegenwärtigkeit) という弁別的な特徴をもつということである。<sup>(8)</sup>

さらに続けてクラークスは、こうした質性を現前させる「現在のな (gegenwärtig)」空間は、すでに「流れ去った (verflossen)」空間との「対照 (Gegenstück)」なしには立ち上がらないと述べている。すなわち、空間の「現在性 (Gegenwärtigkeit)」が成立するためには、鏡映を介した過去からの差異化が不可欠である。この箇所では「Gegen」という表現が繰り返されている通り、「流れ去る空間」と「現在化する空間」が互いに相手を成り立たせあうような相補的な関係にある。観得過程が流れ去る現実を持続的に感受し続けるとすれば、鏡映過程はそこに瞬間的に切れ目を入れることで印象を生じさせる。ゆえに文中の「直観的に現在のな横断空間 (der anschaulich gegenwärtige Querraum)」という箇所が示しているのは、絶えず流れ続ける時間を、現在という仕方では「横切る (quer)」ような「感性空間」、あるいは「直観空間 (Anschauungsraum)」であると言える。さらに、この箇所の「anschaulich」という語の含意を、前出の「Schauung」という類似しつつも異なった概念と比較しつつ考慮することで次のような構造が明らかになる。すなわち、体験において動的に「観得 (Shauung)」された質性が、静的な「鏡映」過程を通して「感性空間」のうちに「直観的に (anschaulich)」現在化することで「印象」へと結実するに至る、クラークス哲学における現象の構造をここに見て取ることができる<sup>(9)</sup><sup>(10)</sup>。そして、以上のような相補的な時間空間をともなう「印象 (Eindruck)」を魂に受苦 (erleiden) 的な仕方でもたらずものこそ、意識から独立したイメージの力であり、その「表現 (Ausdruck)」であるということになるだろう。

### 3. 感性空間とリズム

以上、『リズムの本質について』に提示された「時間的な現象であって空間的な現象でないものは何もなく、また空間的な現象であって時間的でないものも何もない」という主張の内実を、主著の記述をもとに検討した。最後に、時間と空間がともに「リズム的な分節」であると述べられる思想的な地平を確認し、本論文の結びとしたい。通常、リズムと言えはまず音楽的なリズムをはじめとしたリズム現象を想起する。し

かしクラークスのリズム論は、直接にはリズムとして現象しない事象、例えば以下のような一つの音の響きそれ自体の根柢にもリズムを見出す。

「失明者は生きものに気づくとすぐに歌い始める」とポルトガルの民謡にある。ここで、このような指摘は、音響 (Schalle) や音色 (Klänge) が私たちを力強く動かさしめるがゆえに、それ自体が動かされたものであり、且つそれゆえすべての動かされることの舞台であるもの、すなわち空間を、必然的に現象へともたらしめるのである、という確信を強くする。したがって、一音の響き (Klingen) のリズムは、時間の現象を分節化するだけでなく、生き生きとした力の交代の運動によって空間の現象を満たすことで、空間の現象をも分節化するのである。<sup>(11)</sup>

ここでクラークスは、ポルトガルの民謡を引きつつ、音の響きと動きのあいだにある「魂 (心) 的な引力 (eine seelische Gravitation)」と表現されるような影響関係について述べている。すなわち物理的ではない仕方で音の現象を動きとして魂が受容していることを示唆している。また、音の響きが「空間を現象へともたらし (den Raum, zur Erscheinung bringen)」と述べ、さらにこの現象空間それ自体が「何か動かされたもの (etwas Bewegtes)」であると述べている。先の「感性空間」が物理的な空間ではなく魂にもたらされる印象の生じる空間であったことを踏まえるならば、響きによって波打つように「魂 (心)」を動かされ、揺さぶられる (Bewegt) ことで、音の響きが現れる空間それ自体も同時に現出するということがここで述べられていると言える。つまり音の現象の体験には、魂を揺さぶる音の動きの「観得」だけでなく、その動きの背景となる空間それ自体の「鏡映」が含まれる。その上で、引用箇所のリズムによる時空間の「分節化」という表現に着目すれば、それが音の動きの体験に伴う「観得」と「鏡映」という二つの過程の「交代運動 (Wechselbewegung)」であることは明らかであり、ここにもまた主著において示された現象構造を見出すことができるだろう。

質的な印象を感受する際、時間と空間は相互に基礎づけあいながら現象を魂に感受させる媒介となる。この過程のなかに規則的な精神の作用はまったく関与していない。世界で生起する事象とそれを感受する魂のあいだでいかにして印象が像を結ぶことが

可能か、クラークスはそれを時間と空間の関係という観点から論じていると言える。

註

(1) リュディガー・ザフランスキー『ロマン主義——あるドイツ的な事件』（津山拓也訳）法政大学出版局、2010年（叢書・ユニベルシタス950）。

(2) 新しい現象学からのクラークス再評価の基点となる研究として以下が挙げられる。Michael Großheim, *Ludwig Klages und die Phänomenologie*, Berlin, Akademie Verlag, 1994.

また、同じ観点からクラークス再評価を試みた論集として以下を参照。Michael Großheim (ed.), *Perspektiven der Lebensphilosophie. Zum 125. Geburtstag von Ludwig Klages*, Bonn, Bouvier, 1999 (Abhandlungen zur Philosophie, Psychologie und Pädagogik, Bd. 253).

さらに近年の研究をまとめた論集としては以下を参照。Michael Großheim and Damir Smiljanić (eds.), *Ludwig Klages und die Neue Phänomenologie*, Baden-Baden, Karl Alber, 2024 (Neue Phänomenologie, Bd. 39).

(3) クラークスが示すリズムの例は音楽や舞踊にとどまらず、視覚的な紋様や、絵画の描き出す空間的な流れ、さらには睡眠と覚醒の交代など多岐にわたる。

(4) *Wir antworten mit dem Satze: es gibt keine zeitliche Erscheinung, die nicht auch räumliche Erscheinung wäre, keine räumliche Erscheinung, die nicht auch zeitliche wäre, und die rhythmische Gliederung der Zeitlichkeit der Erscheinung ist daher immer zugleich rhythmische Gliederung ihrer Räumlichkeit wie ebenso umgekehrt.*

— Ludwig Klages, *Vom Wesen des Rhythmus*, in: *Sämtliche Werke*, Bd. 3, Bonn: Bouvier, 1991, S. 531.

(5) *Wer, eben jetzt ein Stück Eis betastend, dessen Kälte spürt, hat nicht das leiseste Bewußtsein davon, daß er den Bewegungszustand der Schauung des Geschehens verlassen und ihn intermediär mit dem pausierenden Zustand des Spiegelns vertauschen mußte, um den präsenten Eindruck der Kälte zu erleiden, und keine noch so geschulte „Introspektion“ brächte ihm je die mindeste Kenntnis davon. Wohl jedoch hat er die Fähigkeit, sich zu besinnen, daß die Anwesenheit der Kälte, ohne welche die Kälte selbst nicht zur Erscheinung käme, weit etwas andres ist als der Tatbestand „Kälte“, und sieht sich dadurch nun aber genötigt, auch dem Augenblicklichen eine, und sei es noch so kurze, zeitliche Erstreckung zu leihen.*

— Ludwig Klages, *Der Geist als Widersacher der Seele*, in *Sämtliche Werke*, Bd. 1, Bonn, Bouvier, 1972–1992, p. 328.

(6) 「Schauung」は既存の訳（ルートヴィッヒ・クラージェス『心情の敵対者としての精神』（千谷七郎・平澤伸一・吉増克實訳）うぶすな書院、2008年）に従い「観得」と訳出する。クラージェス思想の重要な概念であるが、それはテオリアを元とした「観想」の概念から区別されるべきものとされ、またカントにおける「直観」の概念からも区別されるものと述べられている。そのため「観得」という表現によって誤解を避けるのが望ましい。また「Spiegeln」も既存の「鏡映」という訳に従った。

(7) 持続（Dauer）はクラージェスに先行するベルクソン哲学の重要概念であるが、クラージェスは空間化された時間と意識の持続的な時間性を峻別するベルクソンに対して批判的である。クラージェスは空間と時間の相補性を重視し、「分節的連続性（gegliederte Stetigkeit）」の概念を自らの議論の基軸に据える。

(8) *Ohne miterlebte Zeitlichkeit des Augenblicks gäbe es keine Aufeinanderfolge der Augenblicke, ohne diese aber nicht einmal den Augenblick selbst, der zu dem, was er ist, nur dadurch wird, daß er sich gegen das Dauernde abhebt; woraus es zwingend hervorgeht, daß der anschaulich gegenwärtige Querraum das Gegenstück eines verflochtenen Raumes erheischt und allererst im Verhältnis zu ihm den unterscheidenden Charakter der Gegenwärtigkeit hat.*

— Ludwig Klages, *Der Geist als Widersacher der Seele*, in *Sämtliche Werke*, Bd. 1, Bonn, Bouvier, 1972–1992, p. 328.

(9) 感性空間論は絵画空間論にも接続される。クラージェスによれば、芸術的才能に恵まれた者は、事物を描くのではなく、流れ去る現実を鏡映した「感性空間」を描く。たとえば、才能を欠く者の絵が単に岩や水といった対象を示すにとどまるのに対し、才能ある者は、岩の頑強さや水の勢いといった現実の運動そのものを描き出すのである。

(10) こうした時間と空間の関係は、クラージェス哲学の根幹をなす「極性（Polarität）」概念へとつながる。

(11) *„Der Blinde, sobald er nur das Leben spürt“, heißt es in einem portugiesischen Volkslied, „fängt auch schon an zu singen“. Hier sollen dergleichen Hinweise uns nur in der Überzeugung bestärken, dass Schalle und Klänge, weil sie gewaltig uns zu bewegen vermögen, selber etwas Bewegtes sind und daher notwendig den Schauplatz aller Bewegtheit, den Raum, zur Erscheinung bringen. Demgemäß gliedert ein Rhythmus des Klingens nicht nur die Zeiterscheinung, sondern darüber hinaus auch die Raum-erscheinung, indem er sie anfüllt mit der Wechselbewegung lebendiger Mächte.*

— Ludwig Klages, *Vom Wesen des Rhythmus*, in: *Sämtliche Werke*, Bd. 3, Bonn 1991, S. 532.